

西スラヴにおける国家形成について

市原 宏 一

State formation of the West-Slavs in the early Medieval ages

Koichi Ichihara

はじめに

東部中欧地域において強力な支配を展開したアヴァール人が 8 世紀末、フランク王カールに駆逐されると、フランクの東方には政治的空白が生じる。これ以降、この地域にはスラヴ人による国家形成の動きが明らかになり、同時にまた、フランク人年代記作者らの手になる史料上も言及されるようになる。すなわち、9～10 世紀の西スラヴ諸社会において、似たような国家形成過程の展開がみられるのである。以下では、西スラヴ諸族における国家形成に関する先行研究^{*}を踏まえて、この時期の西スラヴ諸社会における特徴を検討する。なお、エルベ・オーデル間スラヴ人における国家形成過程についてはすでに検討を行っているため、本稿は、それらを除く西スラヴ人すなわち、モラヴィア、チェコ、ポーランドを扱うこととする。

モラヴィア

今日のチェコ東部付近には、9 世紀前半、モイミールが、対抗勢力であるプリビナをドナウ北岸のニトラから駆逐して、最初の侯として知られる。そこで獲得した教会は、その後ザルツブルク大司教により聖別される。モイミール没後の 846 年には、甥のロスチスラフがルートビヒ・ドイツ人王により支配者に据えられる。ロスチスラフは、847 年、先にニトラから逐われて、ルートビヒ・ドイツ人王により南方のモサプルクにおかれていたプリビナをさらに駆逐し、これにより東フランクからの自立を強めたと考えられている。なお、この時期のモラヴィアと東フランクとの対峙に際して、849 年にはチェコ人による東フランク部隊への攻撃が知られており、当時チェコ侯がモラヴィアへ従属していた証拠とみなされている。

モラヴィアが東フランクからの一定の自立性を確保していたとされる根拠は、この地域でのキリスト教布教の実態にある。当時この地域への布教に積極的であったのは東フランク、バイエルンの教会勢力であったが、ロスチスラフは、まず教皇ニコラウス 1 世に直接布教のための司祭派遣を求める。これが、東フランクに配慮したと考えられる教皇から断られると、ビザ

ンツ皇帝に要請し、この結果メトヂオスら二人のギリシャ人司祭が派遣される。彼らは、スラヴ語を表記する文字を考案し、これを用いて福音書翻訳や法書作成を行うなど、固有の教会組織構築を試みたとされる。867年の教皇ハドリアヌス2世のモラヴィアとパンノニアへの文書にも、メトヂオスが言及され、873年には、教皇ヨハネス8世の仲介でメトヂオスが修道院を創設しており、ローマ教皇からも公的に認められていたと考えられている。ただし、その後ニトラ司教へのフランク人叙任を契機として、西方からの圧力が強まり、最終的にメトヂオスは辞任、モラヴィアから放逐されている。

他方、ロスチスラフは甥スヴァトポルクの手引きでルートビヒ・ドイツ人王により捕らえられ、874年にはスヴァトポルクがルートヴィヒからその支配を認められる。880年の教皇ヨハネス文書ではスヴァトポルクの守護聖人がペテロとされ、ローマ教皇からもその地位が認められたと考えられる。その支配は拡大し、スロヴァキア、西ハンガリー、ヴィスワ、シロンスク、ゾルブ、さらにチェコまでもが属したとされ、884年には東フランク王カール3世からパンノニアを受封し、890年にはチェコの上級支配権を東フランク王アルヌルフにより保証されている。

スヴァトポルク以降は、ハンガリー人との継続した争いによってモラヴィアは弱体化し、もともとのモラヴィア中心地域に縮小、10世紀初頭には崩壊する。考古学的には定住の継続が証明されるが、モラヴィアは11世紀初頭以降チェコに属することになる。

モラヴィアの初期史からは、東フランクとの対立を基軸として、地域的な結集体を形成しようとする有力者家門の姿が浮かび上がる。当初モラヴィアが東フランクからの侵攻や介入を阻止できた要因としては、モイミール侯による早期のキリスト教受容が想定されている。その後、モラヴィア侯がビザンツ皇帝からの支援を得てキリスト教布教拡大を実現したことが、東フランクに対する一定の自立性を獲得できた根拠の一つとみなされている。しかし、教会スラヴ語は作り出されたものの、結局、当地で継続して用いられることはなかったように、有力家門の支配確立の試みも、成功することはなかった。その背景には、第一には、執拗な東フランクからの介入と同時に、有力家門内部での争いがこれに常に呼応していることに注意する必要がある。同時に、10世紀以降では、東フランクだけではなく、同じスラヴ人である近隣勢力の成長と拡大による緊張関係の深化という点にも目を向けねばならない。

チエコ

9世紀初頭から前半までのフランクの史料には、この地域における小規模な支配への言及が見いだされる。メッツ年代記805年の事項には「この部族の全ての君侯 *universi principes diversarum gentium*」との言及があり、さらに、815年パダボーン、822年フランクフルト、831年ディーデンホーフエンにチェコからの使者が帝国議会に参列、844年にはレーゲン

スブルクで侯 *duces* 14 人が洗礼されている。ここから東フランクへの従属性が推定されているが、ただし、先に述べたように、当時にモラヴィアがチェコをも勢力圏内にしており、849 年には同盟して東フランク部隊へ攻撃を行うなど、モラヴィアに対する従属も想定されている。

9 世紀末、史料上初めて侯としてプシェミスル家ボジヴォイ 1 世が現れる。この者は 870 年頃モラヴィアで洗礼を受けたと推定されており、その妻ルドミラも同様にキリスト教徒である。ボジヴォイの子、ヴラティスラフは、エルベ・オーデル間スラヴ人であるヘベル侯女ドラミラとの間にヴァーツラフをもうける。ヴァーツラフは十数年統治した後、兄弟ボレスラフ 1 世に殺害されるが、数年後には聖人とされ、遺骨が聖堂に安置される。10 世紀末には既にヨーロッパ全体に知られた聖人となり、これ以降中世盛期のチェコ地域意識の結晶核になったとされる。

ボレスラフ 1 世は、950 年にオットー1 世から受封し、勢力圏をシロンスク、ポーランド南部に広げる。ポーランド、ザクセン人らの上層と婚姻関係を結び、955 年頃には最初の貨幣を造幣している。967 年、ボレスラフ 2 世は神聖ローマ帝国との闘争にもかかわらず、マインツ大司教座の下におかれるプラハ司教区を創設する。他方チェコ内部では、オットー朝やポーランドとの提携を探り、造幣を行うような有力者であるスラヴニク家があり、この一門であるヴォイツェフ（アダルベルト）は 2 代目プラハ司教ともなっているが、しかし、10 世紀末にはボレスラフ 2 世がこの一門を倒し、チェコ全体を掌握している。

11 世紀以降には、シロンスク、モラヴィア、エルベ・オーデル間スラヴ人に対する利害をめぐり、ポーランドとの対立が激化する。ポーランドのボレスワフ・フロブリィは 1003 年にラウジッツ、チェコ、モラヴィアを侵略する。チェコ以西ではドイツ国王ハインリヒ 2 世により駆逐されるが、モラヴィア、スロヴァキアへのポーランドによる支配は 11 世紀初頭までは維持される。ボレスワフ・フロブリィ没後は、逆にチェコのブジェチスラフ 1 世が、クラカウなどポーランドに侵攻し、グニェズノからはヴォイツェフ（聖アダルベルト）の聖遺物をプラハへもちだしている。

ブジェチスラフ没後十数年続くプシェミスル家内の後継争いにもかかわらず、その支配には影響がなかったとされている。その根拠としては、支配拠点としての防備施設と奉仕人集落の整備が支配基礎として機能し、領域化を促進していること、11 世紀後半にはプシェミスル家に従属する教会組織が確立されたことである。

グラウスによれば、領域的な一体性を確保しやすいような地理的な要因に依拠して、チェコは、他の西スラヴ人と比較して、比較的短期間で強力な家門による支配を確立している。10 世紀末のスラヴニク家の排除により、13 世紀までプシェミスル家による中央集権的な支配が貫徹していたとされる。これについては、13 世紀以降の貴族層の始源を 10 世紀に指摘する見

解もあるが、他の西スラヴ諸勢力と比較して、支配家門の突出した地位とチェコ地域の領域的一体性は際だっている。

チェコ社会内部での一体性についての認識形成として 2 つの特徴が挙げられている。一つには、さしあたってポーランドへの対抗意識が形成されるという点である。その事例としては、ポーランド侯ボレスワフ・フロブリィのプラハ侵略と、その駆逐に際して、ヤロミール侯がハインリヒ 2 世と同盟したことが挙げられる。ただし、ブラーターによれば、9 世紀末、チェコに統一的な支配が形成されるのは、当時近隣勢力がそれぞれに内部問題を抱えた結果チェコへの干渉が弱まったことに要因があるとされており、例えば、東方ではスヴァトポルク侯没後のモラヴィアの弱体化、西方ではルートヴィヒ幼童王後の東フランクの内紛などである。また、11 世紀以降のポーランド・チェコ間の対立は、相互の内紛を利用したとみなされており、これが逆に遠心的作用を持つ特徴であるとも考えられる。

さらに、ドイツとの関係においても、チェコ支配層は形成当初から特異な形態で結びついていくといえる。グラウスによれば、こうした関係は、チェコ学界では純粋なレーン関係と理解されるのに対して、ドイツ学界では、神聖ローマ帝国の上級支配により、チェコへの実質支配が導出される。

第二には、一体性の象徴としての聖ヴァーツラフ崇拝である。12 世紀前半の年代記作者である、プラハ司教座聖堂参事会長コスマスもチェコを守護聖人ヴァーツラフと結びつけ、これが社会階層的に拡大していったとされている。

ポーランド

史料上に証明される侯は、10 世紀後半のミェシコ 1 世である。ミェシコは 965 年にチェコ侯女ドゥブラウカと結婚し、一年後その影響で洗礼を受ける。ポモージェのほとんどを侵略、レーブス近傍でオーデル中流域を超えるなど、支配を北西方に拡張している。ドイツ皇帝オットー 3 世とは、エルベ・オーデル間スラヴ人を共通の敵として、良好な関係を維持する。968 年にはキリスト教化の拠点として、ポズナンに教皇直属の司教区がおかれ、これにより固有のポーランド教会組織を作る道が開いたとみなされている。

992 年、ミェシコの後を継いだ長男ボレスワフ・フロブリィは、プラハ司教ヴォイチェフ（アダルベルト）をグダンスクに受け入れ、プルス人への布教に従事させ、997 年にヴォイチェフが殉教すると、遺骨をグニェズノに安置している。1000 年には、ヴォイチェフの知己であった皇帝オットー 3 世のグニェズノ来訪を受け、こうした結びつきを背景にして、教皇ジルベスタ 2 世によりグニェズノ大司教座が設けられている。オットー 3 世を継いだハインリヒ 2 世は、エルベ・オーデル間スラヴ人と同盟するなどしたため、ポーランドとの関係は悪化し、西方への拡大は阻止されるが、ボレスワフはシロンスク、クラコウ、チェコ、モラ

ヴィア、スロヴァキア、北方ではラウジツと東ポモージェに侵攻し、さらに 1018 年、キエフにも侵略している。ボレスワフはまたハインリヒ没後の 1025 年には、教皇ヨハネス 19 世の同意によりグニェズノでポーランド国王の戴冠が行われている。

ボレスワフ没後、チェコ侯ブジェチスラフの侵略により深刻な荒廃が生じ、この時グニェズノからプラハへヴォイチェフ（聖アダルベルト）の遺物に移されてしまう。他方で、11 世紀前半の農民蜂起とこれに連なる異教反抗によりカジミエシ 1 世はクラコウへ居所を移設することになる。その子ボレスワフ 2 世は、叙任権闘争において、国王戴冠をもたらしてくれる教皇を支持し、反皇帝政策をとるにいたる。ボレスワフ 3 世は、ボレスワフ 1 世来再び、シロンスクとポモージェを侵略し、勢力圏をオーデル河まで拡大している。さらに当時、バンベルク司教オットーの西ポモージェ布教により、ウゼドム、ヴォリン、カーミェニに新たな司教区が設けられる。しかし、これらの歴代支配者は、内政では継続して、強力な有力者層に対抗しえず、ボレスワフ 3 世没後は再びポーランド社会は分裂する。

先行研究者が主張するのは、侯の支配が確立されなかったという点である。たとえば、ボレスワフ 2 世に謀反をたくらんで、処刑されたクラクフ司教スタニスワフがアダルベルトと並んで守護聖人とされたことなどから、ブラーターは、ピアスト朝が他の有力層を排除しきれなかったと見ている。グラウスは、スラヴ人 *Sclavi* という一般的呼称がチェコよりも早期に消滅していることから、早期の国民意識形成を説く論調に対して、チェコやモラヴィアとは異なり、ポーランドでは近隣に多様なスラヴ人がいるために呼称として用いられ得なかったからと推定している。また、ブラーターも同様に、9～10 世紀にはほかのスラヴ人に挟まれているような位置にあるため、ポーランド人がスラヴ人と呼ばれることはほとんどまれであり、9～10 世紀にはより細かな地域グループ呼称が見いだされるが、この地域全体を一つにまとめる呼称はなく、これが政治的分裂のためとみなされている。

* * *

9～10 世紀の西スラヴ諸社会に関する先行研究を整理するならば、国家形成過程について以下のような特徴をあげることができる。

グラウスは、国家形成と、これを単位とする一体的な意識の形成をそれぞれ別にあつかった上で、国家に基づく意識形成にあたっては、言語が仕切るのには一部にすぎないとして、言語障壁のなかったポーランドとチェコの間でも意識において区切りが生じたことを指摘している。この点は、ブラーターも、今日に至るような明確なスラヴ語の分岐発展は 10 世紀末になって初めて生じるとして、包括的な政治的支配がコミュニケーションの地域区分となったのであり、言語が領域的な区切りの原因ではないと主張している。ただし、言語に差違がなかったとしても、当時の西スラヴ諸社会全体にスラヴ人として一体的な同族意識があったかについては

疑問が呈され、例えばポーランドとチェコの継続的な対立関係や、エルベ・オーデル間スラヴ人はスラヴ人を含む近隣勢力すべてから異教徒敵対者とされたことが挙げられる。

むしろ、グラウスは、一国の自己意識の先鋭化が、近隣に外敵を意識させることになり、これによってかえって近隣諸地域の自己意識を高めるとしている。ブラーターは、一体的な意識形成についてはふれていないが、国家形成それ自体の牽引力として近隣との絡み合いを見いだしている。西スラヴ諸族を囲む、東フランク・ドイツ、北方のスカンディナヴィア諸国、東方のキエフルーシ、南東では当初はアヴァール人、さらにマジヤール人との交流・対立に形成の誘因を探っている。

なお、グラウスは、国家形成とこれを単位とする意識の形成においては地域的差異を指摘する。すなわち、チェコとポーランドには国家形成と同時にこれを単位とする一体的な意識の形成が見られるのに対して、モラヴィアは一旦国家が形成されるものの、チェコに併合されてしまい、エルベ・オーデル間スラヴ人は国家形成が試みられるが、一体的な意識が形成されることはないままであったとしている。グラウスは、こうした地域的差違の原因として地理的環境を想定している。チェコが他と比較してより早期から領域的な一体性を確保していたのは、山地によって囲まれているという地理的特性があったとして、これによって、プシェミスル朝支配成立後は、その政治的統一が脅かされることはなかったというのである。

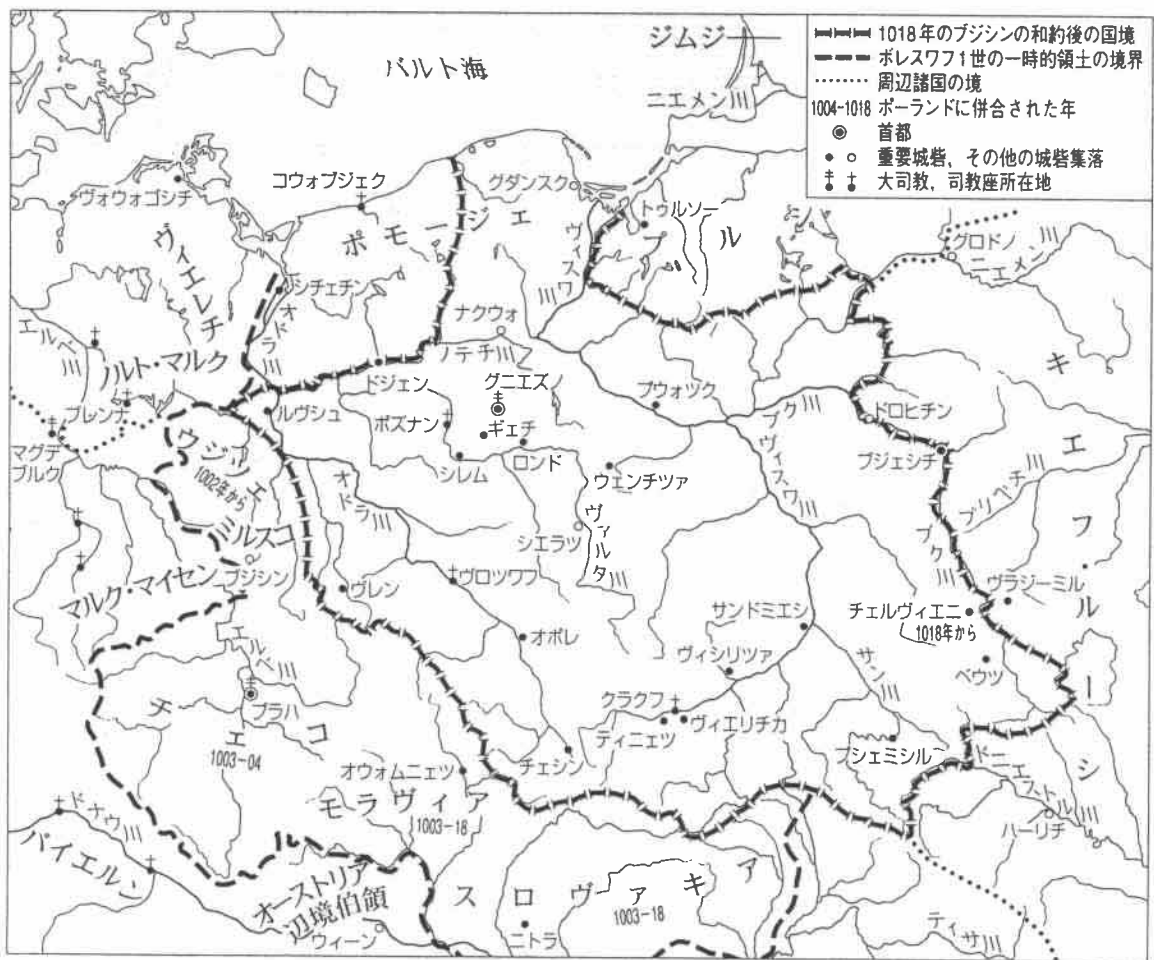
国家形成過程においてさらに重要な牽引力とされるのはキリスト教との関連である。グラウスは、国家を単位とする一体的な意識形成において、自立的なキリスト教会組織の形成や、スラヴ人聖職者およびスラヴ人聖人に、一体的な意識の結集核としての意味を強調している。ブラーターは、西スラヴ諸族の支配上層がキリスト教を受容することにより西・中欧地域への結びつきを容易にし、同時にこれをもってイデオロギー的な「結合手段」を獲得し、支配安定化の手段とすることができたとする。

先行研究で指摘されている国家形成における諸要因については、さらに、個々の歴史的過程に即した検討が必要であるが、さしあたって、個々の社会における国家形成にあたって、重要な要素として近隣諸社会との関係が踏まえられているという点が注目される。外敵を阻む自然的な地理環境であれ、キリスト教組織・聖職者の役割であれ、これらは、単なる一国・地域の内在的な条件ではなく、近隣諸世界との交流、外部社会からの働きかけによる。また、この点は西スラヴ諸社会相互にも妥当する。西スラヴ地域に 9～10 世紀にほぼ統一して見いだされる国家形成が、この地域を取り巻く近隣、および地域内部の諸社会相互とどのような関係をもつのか、支配上層間の婚姻や交友、キリスト教受容のあり方などの相互交流の諸相ごとの検討が必要となる。

※

Brather, Sebastian: *Archaeologie der westlichen Slawen. Siedlung, Wirtschaft und Gesellschaft im früh- und hochmittelalterlichen Ostmitteleuropa*, Berlin, New York, 2001.

Graus, Frantisek: *Die Nationenbildung der Westslawen im Mittelalter. Nationes. Historische und philologische Untersuchungen zur Entstehung der europäischen Nationen im Mittelalter*, Bd. 3, Sigmaringen, 1980.



ボレスワフ1世時代のポーランド

伊東・井内・中井編『ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社1998年、45頁より